

野付湾における白鳥保護活動について

—多くの方々に感謝をこめて—

瑞 木 博

本会の記念誌に一文を記することを大変光栄に思います。私が野付湾に面する別海村（後に町制施行により別海町となる。）尾岱沼の野付小学校（昭和33年4月から昭和36年4月まで）・野付中学校（昭和36年4月から昭和61年3月まで）に在職し、多くの方々のご指導をいただきながら、オオハクチョウに魅せられた一端を述べてみたいと思います。

当時、尾岱沼地区は辺地寒村・交通の便も非常に悪く、冬期間（11月から翌年5月頃まで）は完全な陸の孤島となり、生活圏である隣町の標津町への交通手段は、もっぱら雪中徒歩。急病人が出た時は個人の馬そりであった。地域経済も低迷し、村役場・魚協組などの職員の俸給にも遅配があったと言われていた。地区の半分は無電化であり冬期間は停電の多い僻地あり、地区の人々の気持ちもややもすると沈みがちな時代でもあった。

冬期間（通常11月から翌年4月末まで）湾の氷上かなたから、コーン！コーン！というハクチョウの声が響き、氷上はるかに群々が点々と認められた。野付小学校在職時代、冬期間 受持ちの子供たちの弁当のおかずが時によって肉類が多く、また、時々父兄の家庭によばれた。シモフリ（霜降り？）のきれいな肉をたらふくごちそうになった。ハクチョウ類は冬期間の隠れた貴重なタンパク源であった。「白い鳥の肉を食べると頭が悪くなる！」と子供たちに伝え、父母から再三にらまれた記憶がよみがえる。これらのことは、公表出来ないが皆んなが知っている事実でもあった。したがってオオハクチョウ達が岸に寄ったり、姿を見せることは稀であった。群れには非常に強い警戒感があり近付く事など全く不可能な状態が続いた時でもあった。

学校教育の実践現場にも、愛鳥思想が導入し始め、次第に定着をし始める。野付中学校在職の昭和42年の冬、異常な寒気が続き湾内が完全に結氷した。従来、春別川河口・野付湾入口海域は結氷しないのが例年であった。この年は低気圧の通過、停滞による暴風雪によって湾外の流水群が（地元では湾外から流入する流水群を舶来氷とよぶ）湾内に流れ込み浅瀬に乗り上げ底着したために結氷が始まってしまった。いつもなら漂流しながら風向き・潮流によって湾外に出るが、この年は悪条件が続き互いに影響し合い最悪となってしまった。生徒達からハクチョウ群の異常が次々と伝えられた。氷上に点在する群々の周囲はコゲ茶色に染まり、個体の多くは飛び立つ事が出来ないものが認められた。素人が見てもその異常さや疲弊した群々の状況は緊急を要すると思われた。「何とか救う方法はないか？」「早くしないと全滅してしまう」「議論より行動を！」と生命を救うという単純な小さな行動が始められた。「何をどうすればよいのか？」「何を食べさせたら良いのか？」「誰れに相談し、どんな指導を受けたら良いのか？」まさに、てんやわんやのスタートであった。これらの緊迫した状況を新聞雑誌は『瀕死の海峡 白鳥は訴える』とその悲惨を報じてくれた。

「ハクチョウ達は朝、春別川河口に集まり水を飲む」「水がなければ生き物は死ぬ」「先にハクチョ

ウ達の水飲場の確保を…」など死と直面した緊迫した状況の中で、春別川河口の氷割り作業が中学生たちによって実行された。氷割り作業が紙上に報じられると、湾内のハクチョウたちの窮状に関心が集まり、多くの方々の善意と激励が寒村尾岱沼に集まり始めた。危険が伴う砕氷作業への中学生の参加は多少の批判はあったが、海中転落を防ぐ方法として初めから水中に入り、胸の深さまでの作業とするなど今思うと、無謀な発想と指揮で強行した。別海駐屯地の自衛隊員の救援氷割り作業と一緒にやっても、隊員の海中転落を見ながら、一人の転落者もなく地元っ子の意気を示し作業量も意欲も負けなかった。これらの事について反論したり、説明説得する時間的余裕がない状態であった。救命・氷割り作業に毎日参加した生徒達も『生命を救え！ 自分たちの手で1羽でも！』と単純純粋な気持ちであった。今日言われている様な高尚な論議ではなく、手助けすれば死ぬことを救う事が出来る！と言う行動だったと思う。

何日間も連続して河口を開く。一夜にして結氷してしまう。河口を開いて、氷上を春別川の水が静かに、ほうように拡大し、オオハクチョウの群れが次第に水に移動してきた様子は忘れる事ができない。胸までの水中作業をしている生徒たちが頭上を舞うオオハクチョウの姿に、歓声を上げて見上げている姿は終生忘れる事が出来ない。これらの事が報じられる事が重なると、オオハクチョウに対する関心が高まり、作業する生徒や学校にも激励の声が届けられた。今まで作業や救助活動に支障となっていた議論や批判もなくなり、それに対する気苦労がなくなった事は本当に有難かった。救助保護活動についても北海道庁林務部・根室支庁・別海町を結ぶ行政側の対応も迅速充分になされる様になり現地の私達が動きやすい支援体制が出来あがった。これらの事は本会会長、松井先生が道庁担当者・根室支庁・別海町等行政担当者を指導指揮されてきたものであり現地の者ばかりでなく、国内各地のハクチョウ渡来・越冬地の関係者の全てが、その薫陶を受けた。これらの事は決して忘れてはならない。

この事をきっかけにして、オオハクチョウに対する給餌活動が始められた。道林務部よりエンバク麦40～100俵が次々と届けられ、関係者・関係機関の指揮命令系統が生理され実行された。中でも茶ガラ類は、道内外の善意あふれる人々が、オオハクチョウ救援にと送ってこられたものであった。

当時の国鉄 根室標津線標津駅（現在廃止）に駅止め荷物として到着した。この大量の荷物（茶ガラ）を標津駅～尾岱沼までの荷受け運搬方法と駅止め保管料金の支払が大変であり、頭痛の種となった。車輛の方は最後には、部落支所の消防自動車で運んだ。今日なら絶対に見る事の出来ない1コマであった。

給餌方法も全く分からず、鳥の専門家と言われる人達に聞いたが、その方法はどれもうまくいかなかった。エンバク麦を主とした訳は水に浮き、ハクチョウが食べやすいのではないかと流氷に乗って群まで届くのでは？と言ったことが原因であった。最後に水辺にまく方法が一番効率的であり効果があった。また、給餌観察の結果“茶ガラは食べない・栄養がない”という事も分かりはじめた。幾度試みても結果は同じだった。以後この事から茶ガラの始末に困ったり、食べないという事が報道されると、“好意を無にした”と再三に渡り、批判と抗議・給餌方法試験について指摘され弱ってしまった事も懐かしい思い出である。

昭和44年の冬、再び野付湾が全面結氷した。この時は多少の経験と救助救援活動の要領も身につ

き対処する事が出来た。幼稚な観測体制ではあったが、気象条件と変化・推移を把握する事によって、予測する事が出来るという事は、初動体制が迅速に出来活動にも余裕ができた。オオハクチョウに対する関心も高まり、行政当局担当者の理解・支援・施策も深まり、被害も最小限度にする事が出来たと思っている。救護した個体に対しての治療行為も実施され、町当局から保護舎・保護池も設けられた。校舎の一部や公宅の一部から鳥達をかかえて異動させたり、引越しをさせた記憶がよみがえる。氷上から助け出された個体は、温水を幾度もかけ、強制的に手製の給餌押し込みポンプで、調合した液状のものを入れる。調合した餌の消化状態を確認しながら調合を繰り返す。全て手造り手さぐりの活動であった。助ける事の出来なかった無念さ！元気に回復したもの、私・私たちの手を経ていった鳥達は、全てが生命の尊さと大切さ・不思議さ・自然界のすばらしさを与えてくれた。希望と反省、涙と笑顔との繰り返しでもあった。

給餌に対する是非をめぐって論議も始まった。加えて、観光資源の開発確保という面からの強い期待と要請が商工観光業者、行政からも出始めた。道東三白観光（タンチョウ・流氷・白鳥）と銘打って業者が企画されたり、対抗して地元から白鳥祭りなどが恒例行事となってきた。交通路・機関の確保と共に春別川河口に予想外の人々が集まり始めた。春別川河口の水辺に鳥も人々も群がる風景に安心と不安が出始めたのも事実であった。観光企画や集客行事のために、純粋な給餌活動が規制されたり、強要され始めたりして次々と色んな思惑がからみはじめた事は残念な事であった。その度々に会長 松井先生が多忙にも関わらず指示・ご指導を繰り返され、啓蒙されてきた事は周知のとおりである。

ハクチョウが越冬する野付湾・春別川河口はその後気象条件の著しい変化・異常な状況の発生もなく過ぎてきている事は、本当に嬉しいかぎりである。自然に対する人々の関心が高くなり、環境問題も論議され始めた。オオハクチョウや他の鳥達・生き物に対する住民感情のあたたかさ・保護思想の浸透も深まりつつある今日の状態を目にする時、更に更にという希望と将来を誤る事のない保護論や議論・実践を期待し、推進したいと思う。

野付湾におけるオオハクチョウの保護・救援救助活動の一コマという事で述べてきた。小さな中学校の生徒たちの、生き物の尊さ・不思議さに対する純粋な気持ちのあらわれた行動の数々。それを支え、指導し、多くの人々に啓蒙と感動を与え続けてこられた現会長 松井先生を始め、多くの方々に改めて感謝を申し上げます。

当時、一緒に冷たい海中に入り、作業に参加した生徒たちは、本会の理事や別海町や地元尾岱沼地域の活動的指導的な人材になり、本会の活動や共に良き理解者になっている事をつけ加えて終わりたい。

現 羅臼町立植別中学校長

注

阿部 学

- ・ハクチョウ類に関する2、3の知見と尾岱沼におけるオオハクチョウ多数斃死の実情と対策試案
日本鳥学会 昭和43年10月20日
第18巻・第85号

斎藤 春男

・鳥獣行政 第11号の3

参考資料

『瀕死の海峡 白鳥は訴える』

北海道の野付湾は、氷点下20度の連日の寒波のため、厚さ30cmもの氷で、すっかり閉ざされてしまった。このため、約6000羽の白鳥は、飲み水と餌の水藻を断たれ、飢えと寒さに衰弱して、つぎつぎと冷たく死んでいく白鳥が数10羽に及んだ。この白鳥を救おうと地元の野付中学校の生徒たちが、河口の氷割りに出動した。さらに自衛隊の協力も得られたが、この数多い白鳥を厳寒から救う効果的な手だては、まだ見付からないという。

2月の始めは まだ水面の残る海で 元気に美しい乱舞を見せていた白鳥たちが 今 寒さに凍りついて動けず じっとうずくまり あるものはそのまま死んでいく

この厚くはりつめた氷原は 自衛隊にお願いして爆破でもしてもらわなければ と 広い氷にノコギリを入れながらも気が気でない

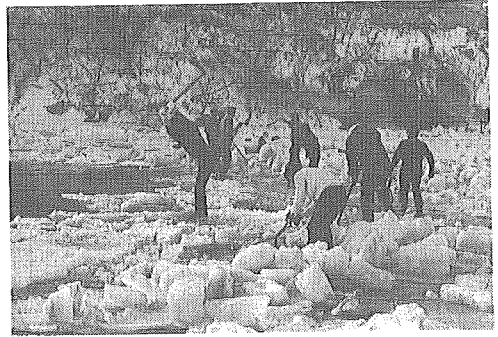
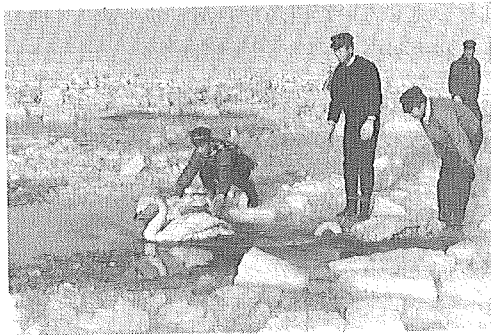
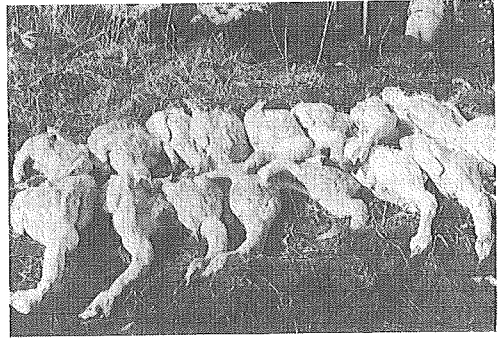
北海道野付の子供たちは、白鳥の鳴き声を、子守歌のように小さい時から親しんで育つ。その鳴き声が途絶え、白鳥は飛ばなくなった。

根室の北、野付海峡をはさんで国後島くぬしりと相対する別海村わかいたつの尾代沼は、白鳥の飛来地として知られたところ。ことしの冬も、6000羽の白鳥が北国の寒空に優雅な乱舞を見せていた。ところが、2月中旬から恐ろしい寒波が来た。連日、氷点下20度を越す寒さ。この寒波に、北海の“天の橋立”とも呼ばれる野付湾内は、一面、厚さ30cmもの氷で閉ざされてしまった。

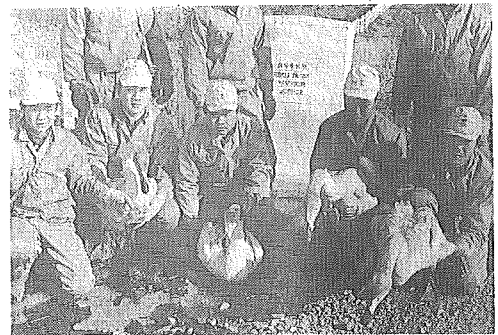
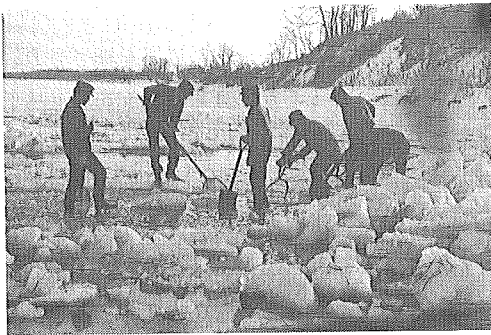
白鳥はこのため、泳ぐ場所をなくしたばかりでなく、春別川河口の真水を飲む場所を閉ざされ、エサの水藻をついばむ手だてを失った。36年以来という寒波は、いっこうに衰える気配を見せず、逆に白鳥は衰弱し飢えて、氷の上にうずくまる。うずくまって動かない白鳥の羽に氷が容赦なく凍ってついて、翼を奪う。そのまま冷たく死んでいく白鳥が続出した。

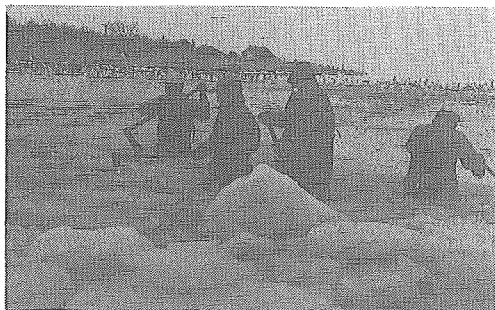
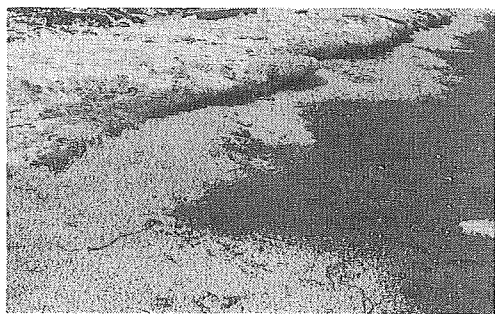
野付中学校の生徒たちは、この瀕死の白鳥を保護し、餌を与え、河口の氷の海につかって、氷割りにのり出した。しかし、その看護もむなしく白鳥は死んでいき、沿岸から8kmにもおよぶ広い氷原に点在する6000羽の白鳥を救う方法は見付からないという。せめて死んだ白鳥の埋葬をと思っても、これとて完全に出来ない。沖合にシベリアから押し寄せた流氷群もあって、氷の解ける季節はまだ遠い。白鳥の天国は、白い死の海に化したまま動かないのだ。

野付中の生徒たちは、衰弱した白鳥を保護し餌を与えた。この手厚い看護に元気を回復する白鳥もあったが むなしく死んでいったものも少なくない。

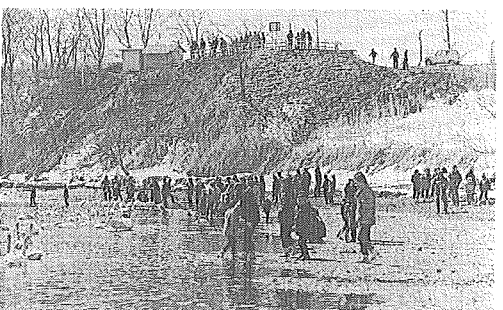


沿岸から8 kmにおよぶ広い氷原に点在する白鳥は、生徒たちだけでは到底救いきれない。可哀相だと思いながらも手がまわらない。





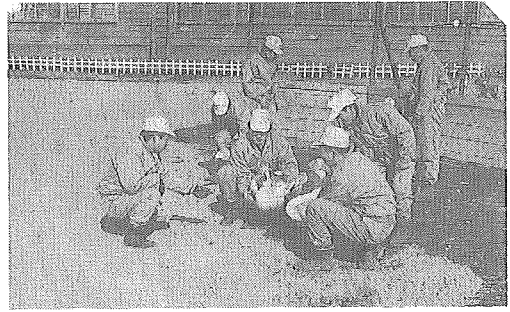
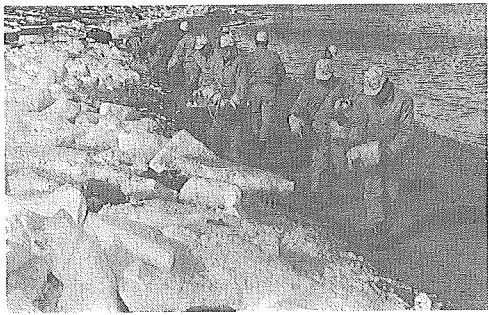
43. 2 官民、生徒と一体となった作業



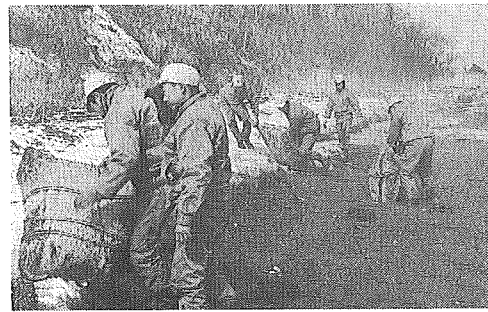
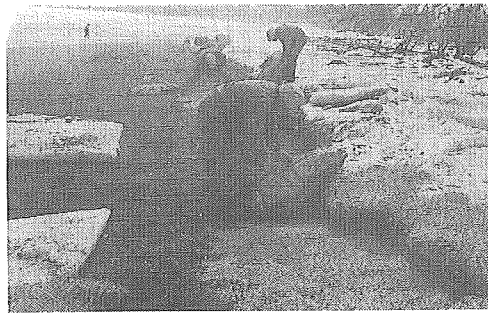
44. 2 春別川に



餌についた群れと接近しない群れ



衰弱した白鳥を校内にもちかえり保護し
元気を回復すると氷原に放す

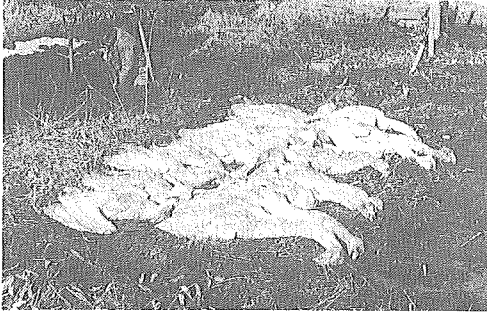


野性の（自然）白鳥に対して、初めてと
いわれる餌付けを行なう



川口をあけ給水、給餌場所をあける
必要に応じて自衛隊に出動してもらう





採餌活動をせず、給餌のみを求めて餓死した幼鳥、救援用の餌がなくなったため、観光期間が過ぎるとこの様な悲しい被害が生まれる。幼鳥のみ、群れからはぐれてしまう。防止対策として追い払ったが、報道機関から誤報された。

